



福岡市人権を尊重する市民の集い 『部落差別の現在 部落解放への展望』



講師 関西大学社会学部教授 内田 龍史氏

令和7年12月8日、東市民センター「なみきホール」で、標記講演会が開催されました。講師の内田氏は、現代の部落問題を中心に、マイノリティ（少数派）であるがゆえにマジョリティ（多数派）から見過ごされがちな差別・排除、さらには災害などの社会問題について研究されています。当日は、現代社会の中でみる差別のメカニズムについてお話いただきました。

まず、部落と呼ばれる地域に住んでいた丸岡忠雄氏の「ふるさと」という詩を紹介され、以前は故郷をかくすことが重要で、他人に己の故郷を知られることは、いかに苦痛を受けるのかという内容の詩で、その最後には我が子に“これがわたしのふるさとです”と名のらせたいと結ばれていました。いかに部落差別が理不尽であるか、子の代には絶対になくなってほしいとの強い思いがあり、いかに部落差別されるのが人を傷つけているのかよく分かるものでした。

以下、内田氏の講演内容をまとめました。

今どき部落差別を口にするのは、寝た子を起こすことになって問題をより複雑化するのではないかという意見も多い。では私たちは部落のことをどれだけ知っていて、どのようなことが起っているのか、理解しているのだろうか？どこかの誰かが困っている、では、どうするのか？その問題とはどんなことかを知らないと解決できない。知ること、認識してはじめて問題への対応を考えることができるのである。まず、部落問題をちゃんと知って欲しい。

さらに、現在の部落差別の問題として、

- ①部落に対するマイナスイメージがインターネット上で拡散されている。
- ②インターネット等で、部落の人や場所が暴かれている。
- ③部落問題について「知らない」「意識がない」という若者たちが全体的に増えている。

フェイクニュースにだまされて、差別を拡散している可能性が高まっている。このように黙っておけば収まるということではなく、差別に直面したりして始めて、現実と違うことが拡散される怖さを感じるのである。

現代社会は、いろんな人が関わりながらたくさんの人に支えられて生きている。それは人と人とのつながりがあるからこそだ。事実を知り、部落差別に対しての正しい認識をもつべきだと思う。

絵本の紹介

人権を尊重する市民の集いでは、同和地区というだけで、謂れのない差別を受けている人がいるという話でした。福岡でも過去に悲しい事件があったことを私たちに伝えてくれる絵本がありますので紹介します。



『いのちの花』
そのだひさこ:文
丸木 俊:絵

福岡県内のある被差別部落に伝承されている江戸時代（1800年・寛政12年）の話と地域の中の寺に残っている資料、それにまつわる伝承を元に作者の園田さんが創作されたものです。物語は地域の芝居の上演中に、酒に酔って暴れた武士を打擲（殴りつけること）して逃げた5人の若者がいました。それは5人の町人だったろうと言われていますが、武士の面子を保つため、すぐに犯人捜しが始まります。このまま犯人が見つからなければ村がひどい目に遭います。そこで被差別部落の若者5人が自分の生まれた「むら」を救うために名乗り出て、無実でありながら処刑されたという話です。人の命の大切さ、重さはみんな同じはずです。

公民館にも置いてある本です。ご一読ください。

人権教育指導者向け学習資料 KARA FULL No.23 より抜粋

あとがき

今年度は、三苦校区創立30年であると同時に、第二次世界大戦終結80年でもありました。しかし、今でも世界各地で起きている戦争や民族対立、国家間の不信や分断。こういう争いこそ、人権尊重の対極にあるものです。

一方、我々の近くに目を転じれば、本号で紹介されている和白中学校や三苦小学校での「ハッピーボックス」等で友達の良さを認め合う運動、そして立花高等学校での人間性あふれる教育、これこそ「人権尊重」そのものではないでしょうか。それに加え白砂青松の三苦の自然、なんと平和な地域でしょう。このような環境が世界中に広がっていくことを願うばかりです。

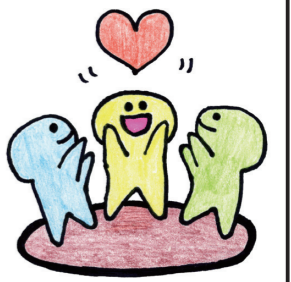
なお、本誌冒頭の絵は、三苦2丁目の城戸勝馬さんの作品を基にデザインしたものです。

お知らせ

- 「もやい」は第50号からカラー化し、回覧板で皆様にお届けすると同時に、三苦校区のホームページでもご覧いただけるようにしています。
スマホ等で、「住みよいまち三苦」ホームページを開き、その「キーワード」または「検索」の欄に「もやい」と入力すると、ご覧いただけます。
なお、ホームページにつきましては、毎月の「三苦公民館だより」の2面をご覧ください。
- 「もやい」第52号は、少し部数に余裕があります。ご希望の方は、公民館までご連絡ください。

もやい

第52号



発行所 三苦校区人権尊重推進協議会

事務局 三苦公民館 TEL. 092-606-4511
印刷所 社会福祉法人 福岡コロニー



温かいつながり

本校生徒会の活動の一つに、『ハッピータイム』があります。給食時間に「ハッピー！」という元気な声で始まる放送で、生徒から寄せられたハッピーな出来事を紹介する時間です。「英語の小テストで満点取れた、ハッピー！」「最近、運がめっちゃ良い、ハッピー！」など、生徒の何気ない喜びを知れる、週に1回のこの時間が私の楽しみになっています。



和白中学校教頭
岡部友哉氏

「引退する部活の先輩を笑顔で見送れた」「友達の一発ギャグが面白くてめっちゃ笑った」というように、他者とのかかわりの中に大きな喜びを感じている投稿も多く、それらを全校生徒で共有することが、本校生徒の明るさ、素直さ、礼儀正しさに繋がっているのだらうと思っています。昼休みには、投函用の箱（ハッピーボックス）の周りで、ニコニコしながら、自分のエピソードを記入する生徒の姿をよく見かけます。

誰かの喜びや良さをすることは、一人一人を大切にしようとする心の土台作りにきつとなります。各家庭や、それぞれの職場など、属する集団の中でも、ハッピーを伝え合い、温かい心で過ごせたらいいですね。

三苦小学校の取り組み

三苦小学校では、児童が自分のことを好きになり、友達の良さに気づく取り組みを通して、お互いを認め合うことができる児童の育成を目指しています。



三苦小学校教頭
武田敏氏

日々の授業では、道徳の学習を中心に、各学年の児童の発達にあわせて、人権に関する身近な問題を取り上げ差別や偏見について考えています。また、学校生活の中でも、友達と協力したりケンカしたりして関わることで、相手の立場になって考え、人に優しく接することができるようにしています。

学校全体の取り組みの一つとして、「ハッピーボックス」があります。友達の良いところをカードに書きボックスに入れると、給食の時に放送で紹介されます。書いた子も紹介された子も放送を聞いている子も心が温かくなります。三苦小学校では、このような教育活動を通して、児童の人権感覚を高めています。

これからの社会は多様化が進み、多様な人たち、違った価値観の人たちとも互いを尊重し理解を深めていく必要があります。三苦の子どもたちが社会に出たときに、様々な立場の人の気持ちを考え、行動に移すことができるよう教育活動を推進していきます。

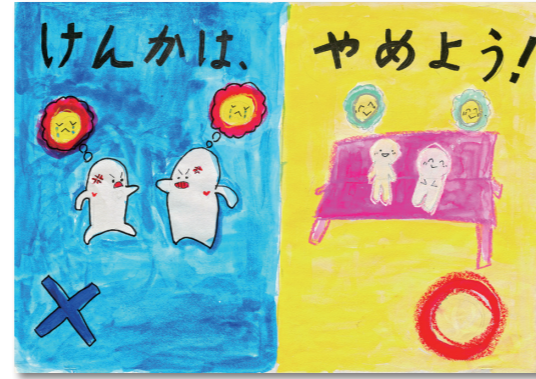
人権ポスター 三苦小学校4年生



三久保 結翔



安部 椋音



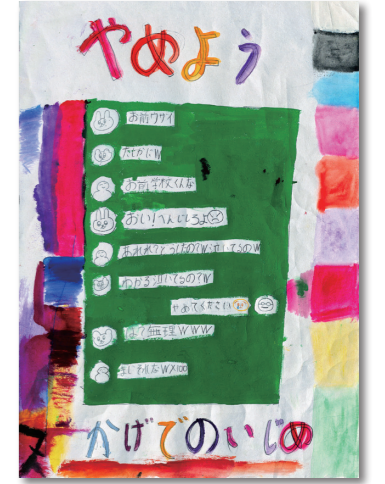
大塚 紫貴



堺 麻友



副嶋 一花



山内 理央奈

秋のふれあい人権講座とコンサート

10月19日(日)13時~16時、和白中学校体育館で、和白・奈多・三苦3校区合同の「秋のふれあい人権講座とコンサート」が開催されました。

第1部 人権講話

「頑張らなくていいんだよ」

立花高等学校校長 齋藤 真人氏



同校は、和白丘の上、和白丘中学校の隣にあり、三苦の皆様もご存じのことと思います。ここの生徒さんたちは、校長先生のことを「校長ちゃん」と呼んでいるそうです。(以下本稿でも齋藤校長先生のことを「校長ちゃん」と記します。)

まず校長ちゃんは、「和白中学校校歌」の作詞者、阿部清美先生が立花高校の創設者で、昭和32年当時仲間と退職金を出しあって創られたことを紹介されました。

校長ちゃんの口癖は、「よかよか」、また人権については「どんな人であれ、第三者から、とやかく言われる謂れはない」、「その人が今持っているものが100点だ」と主張される。

さて県内の私立高校が定員割れをしている中で、立花高校は、定員450名に対して本年519名が入学、その多くが不登校経験者だそうです。また、「自分の名前が書けるだけで合格する」と揶揄されるが、校長ちゃんは「これがうちの学校の誇りだ」と主張される。

この国の社会は個人より集団に重きを置き、「皆同じであること」を求めている。例えば、学校は定時まで登校する、高校を卒業すると大学進学か就職するのが当たり前、このような当たり前が、当たり前ではない人を苦しめてい

る。このような当たり前からの脱却が必要である。なかなか登校できない子がいる、その子が遅刻してきた、その子はその陰でどれだけ苦しみ、努力しているか、それを褒めてあげよう。また、100の「頑張れよ」より、たった1回の「よう頑張ったね」との共感的理解が大事とも。

また時々、生徒のトラブルはあるけれども、それらを常に温かい心で見つめ、対処されている。

例えば、ある生徒さんが学校に行けず公園で過ごしていたことを知った母親が、それを叱るのではなく「ごめんね、気が付かなかった」とその子を抱きしめたこと。

ある深夜、警察から電話があり、当校の生徒をカラオケで保護したと。そのときそのお母さんは涙を流し、自分の子どもが友達とカラオケに行けるようになったことが嬉しかったと。

校長ちゃんは、これらのことに感銘を受けたと。

数名の生徒と県内の中学校を訪問したときのこと。出されたシュークリームに、ある生徒が「校長ちゃんティッシュ持とう?弟へのお土産に」と。ティッシュとともに自分のシュークリームを渡すと、それを一口食べたそ

の子、「わー美味しい、生まれて初めて食べた」と。それに涙する校長ちゃん。

さらに、生徒たちが育てた野菜を学生食堂で使っていること、就職できなかった卒業生に対し就労支援等の福祉活動、更に、保護猫等の動物愛護活動等も行っているとの紹介がありました。

そして最後に、「苦しいときには、SOSを發しましょう」、「できることに目を向けて、それを賞賛し合える社会になれば」と話を結ばれました。

こんな心優しい校長ちゃんの下で学ぶ生徒さん、そして一緒に仕事をしている教職員の方々も、なんと恵まれているのでしょう。

なお、校長ちゃんは、文字通り「校長ちゃん」のペンネームで本を出されています。『それで、よかよか86の愛のメッセージ』(中村堂)校長ちゃんの温かい心がにじみ出るような本です。



第2部 人権コンサート

「生まれてきてくれてありがとう」

シンガーソングライター mon さん



まずmonさんは、二人の子どものお母さんで、その娘のあだ名をとって「mon」を芸名にしたと。そして、生まれてきてくれた子どもたちへの感謝の気持ちを歌った「短い愛の歌」を紹介されました。

次に、monさんの出自、幼い頃おばあさんに育てられてきたこと、そして小学校の頃は、落ち着きがなく、忘れ物が多い、自分勝手に行動する、音に異常に反応する子だったと自己紹介。従って、小学校の頃は、同級生からのいじめに遭い、先生からも注意を受け叱られることも多かったそうです。



そんな中、小学校3、4年生の時の担任の先生は、そのようなmonさんの特性を見抜いてか、毎日の終業時「帰りの会」で、monさん

が自由におしゃべりし、歌える時間を作ってくれた。ここで、monさん、先程の校長ちゃんの話を引き合いに、「大人次第、大人が褒めてくれれば嬉しいし、自分のことも好きになった」と。そして今日のこの会場でも、小学校3、4年生の時と同じことをしていると。

さらに、「ほんとはね」~目立たないところにあるのが愛情で、なにげないところにあるのが幸せ~と歌われる。

そして、「自由とは、お金や時間があることではなく、自分で何でも決めることができること」だと話を結ばれました。

最後に会場みんなで野口雨情作詞の「しゃぼん玉」を歌ってコンサートを終了しました。第1部、第2部と、とても心温まる一日でした。